

ひつつきもつつき

谷口直之

東京都・七二・無職

狭い二DKの間で、「あ、うーん」と背伸びをしたお前……。

「お・は・よ」とわし。「お・は・よ」とお前。「まだ出て来るな。わしや寝坊したんじや。じやから朝食が遅れるんじや」とわし。「はいはい、そんならぬくもりを楽しんでる」とお前。

不器用なわしの出来ることと言えば、今んとこ簡単な朝食を作るだけ。悪いけど。

お前とわしが殊の外ひつつきもつつきになったのは、銀婚記念にヨーロッパへ行ったから。それがきっかけ。

一九七九年六月、パリのとある長い地下鉄の通路で、お前はハンドバッグを引ったくられた。わしは、とっさにお前を抱き止めた。その時、お前を守る人間は自分しかないと思うた。そして優しくなかったそれまでを恥じた。

それからというもの、わしらは有名人になった。有名なひつつきもつつき。

広島でリタイアし、それからバブルに追われてとんでもない旅をしたが、どこの町でも冷やかされたで。「あなた達、何時までも一人歩きができないのねえ」、なんちゃって。

今日もお前は、体調と気分が良ければ、ボタニカル・アートに精を出すことだろう。食卓に草花の鉢を置いて、しきりに極細の面相筆を動かす。わしは傍でエッセイを書く。

こないだの秋日和、隣の区の芦花公園まで散歩の足を延ばしたが、ありやあ良かった。明治の文豪、徳富蘆花先生の旧宅や数々の遺品に深い思い入れがあったが、このわしは、自らを「美的百姓」と呼んだ先生の言葉が気に入った。

わしもの、元はと言えば百姓じやしの、お前だって百姓の娘じや。今は半坪の畑もないが、精神的にはそれで行こ。絵を描いたり、詩文に親しんで心を耕す。

一病息災、長寿保証。美的百姓が、美的百姓女房を守り抜く。の！